

# 『世説新語』に見える「人」の自稱詞用法

——指示の間接化が意味するもの——

井 上 一 之

## 1 序

### 2 自稱詞「人」に関する先行發言

### 3 自稱詞「人」の使用條件

#### 3・1 話者の屬性——社會的屬性

#### 3・2 場面的要素

#### 3・2・1 對人關係

#### 3・2・2 心理狀態

### 4 「人」の機能

#### 4・1 贊嘆における「人」

#### 4・2 怒りにおける「人」

## 5 結語

## 1 序

ひとが對話を行うさいに、まずしなければならないことは、だれがだれに話をしているのかを言語的に明らかにする

『世説新語』に見える「人」の自稱詞用法（井上）

ことである。そのため話し手においては自分自身を指示する記號、および對話の相手を指示する記號が必要になってくる。これがいわゆる一人稱代名詞、二人稱代名詞である。

だが興味深いことに、實際の發話・會話において、これら一人稱、二人稱、三人稱といった人稱代名詞は必ずしもそのルールどおりに使用されているわけではない。つまりある情況のもとにおいては、その代名詞本來の指示對象と實際の指示對象が異なる場合が見受けられるのである。

たとえばひろく知られているように、英語の一人稱複數形「we」は、しばしば對話の相手（You）だけを指して用いられることがあり、逆に二人稱代名詞「You」が話し手自身（I）を指す場合がある。<sup>(1)(2)</sup>一方、現代中國語においても、とくにあらたまった場合には話し手自身（我）を指すのに複數形

の「我們」を用いたり、幼兒などに對して一人稱複數形「咱們」で相手（你）に呼びかける場合のあることが指摘されている。<sup>(3)</sup>

むしろこうした現象は、代名詞の性質上そう頻繁に見られるものではない。しかし、これらの事例によって、人稱の轉換<sup>(4)</sup>とでも呼ぶべき言語現象が、英語のみならず、中國語（漢語）の人稱代名詞においてもたしかに存在することが知られよう。そして本稿で取り上げる「人」という代名詞もまた、そうした用法をもつものの一つである。

古代漢語の「人」という語には、「人間・人類」といった普通名詞としての用法以外に、①一般の人々（一般人）、②特定のある人（某個人・某些人）、③自分・當事者以外の人（別人・他人）という不定代名詞（無定代詞）としての用法がある。このうち①は、英語の one における generic use（總稱的用法）<sup>(補注)</sup>と同様、話し手自身を含めるものであるが、②と③はおおむね話し手（または聞き手）以外の他者を指して用いられるものである。

②子曰、事君盡禮、人以爲諂也。

〔論語〕「八佾」

③子曰、不患人之不己知、患不知人也。

〔論語〕「學而」

ところが、次に見える「人」はこれらの基本的な用法とは少し違った使われ方をされている。

嵇、阮、山、劉在竹林酣飲、王戎後往。步兵曰、俗物已復來敗人意。王笑曰、卿輩意、亦復可敗邪。

嵇康、阮籍、山濤、劉伶が竹林で盛んに酒を飲んでゐた。王戎が遅れてやってくると阮籍は言った、「俗物がやってきてひとの氣分をぶちこわす。」王戎は笑って言った、「きみたちの氣分もやはりぶちこわせるくらいのものであったのか。」

〔世說新語〕「排調」4

ここに見える「人」は、總稱的な「人間一般」の意でもなく、對話の場の外にいる別の第三者を指しているわけでもない。またかといって話し手（阮籍）にとっての他人（王戎）を指すものでもない。「卿輩意」という聞き手（王戎）の表現か

ら推察されるように、「人意」とは、「我（輩）意」と言い換えることのできるものである。つまりこの場合の「人」は、「我、吾」などの一人稱代名詞と同じく、まさに話し手が自分自身を指し示す語、すなわち自稱詞（terms for self）として機能しているのである。

では、なぜ第三者もしくは他人を指す、一種の他稱詞である「人」が、自分自身を指すことになるのか。どのような情況のもとに「人」は自稱詞となりうるのか。「人」がつねに「我、吾」で置き換えられるものでない以上、その使用にはなんらかの規則性ないし制約条件が存在するはずである。

こうした關心から、本稿では、『世説新語』の用例を調査対象として、中古漢語に見える自稱詞「人」の使用規則を整理・分析し、この人稱の變換に關與している諸條件について考えてみたい。なおテキストには、余嘉錫『世説新語箋疏（修訂本）』（上海古籍出版社、一九九三年）を用い、必要に応じて文字の異同に言及する。

## 2 自稱詞「人」に關する先行發言

具體的な用例を検討するに先だって、まず「人」の自稱詞

『世説新語』に見える「人」の自稱詞用法（井上）

用法に關する先行發言を確認しておくことが必要であろう。さきにふれたように、これまでの研究史においてはおおむね、「人」を不定代名詞、または他稱詞（太田一九八五）として分類・記述しているため、その自稱詞用法については、專論としてほとんど論じられてこなかった。<sup>(6)</sup> また一方、近年刊行された字典、詞典類のなかには、「人」が話し手自身を指すという點を指摘するものがあるが、それらは「人」を「我」と同じ一人稱代名詞と見なしており、人稱の轉換（三人稱→一人稱）という本稿の視點とは自ずから異なるものと言わねばならない。

そうしたなかで本稿と同様の視點・關心を共有するものに次の二つがある。

### 2・1 呂叔湘（一九八五）

呂叔湘（一九八五）は、近・現代漢語の「人家」（「人の家」ではなく、「人」＋接尾辭「家」とあわせて、人稱代名詞「人」を次のように論じている。

人或人家指別人，大率是指你我以外的第三者，如上文的例（引用者注：「上文」は省畧）。但也可以拿「你」做主

體，指你以外的別人，那麼「我」也在內；有時候，意思就指的是「我」。從前的人字常常這樣用，後來有了人家，這個詞兒，也可以這樣用，但是人字還是常見。……用人家代我，動機自然也是爲了避免說我；以現代口語而論，人家比我，要婉轉些，也俏皮些。

現代中國語の「人」と「人家」を同一視することについては、疑問を感じないわけでもないが、自稱詞「人」が話し手ではなく、聞き手を「主體」として「あなた以外のひと」とすなわち「わたし」、という言語的なくみによって成り立っている、という指摘は十分留意されてよい。後述するように、この點こそが古代漢語の人稱詞の體系のなかで、自稱詞「人」を特徴づけるもっとも重要な要素なのである。また「我」に比べて「人（人家）」の方が、より「俏皮」な印象——修辭効果——を與えるという點も、考察に値する指摘である。

## 2・2 錢鍾書（一九八六）

もう一つ、錢鍾書（一九八六）でもまた、『太平廣記』卷四〇五に見える「吾人」という語を論じるなかで、「人」の自稱詞用法に言及している。

「吾人」指爾汝，語氣親暱；而「人」又可自指，語氣責怨。如《詩・鄘風・柏舟》：「母也天只，不諒人只」；《公羊傳》昭公三十一年夏父曰：「以來！人未足！」，《解詁》：「以彼物來置我前，人，夏父自謂也……諸人」胥自道也。今口語稱人有曰「咱們」，與小兒語（childrenee）尤多，稱己有曰「人家」，憤慨時更然。

ここでは『詩經』をはじめとして、『春秋公羊傳』、南宋の辛棄疾「眼兒媚・妓」、明の高濂「玉簪記」、『西游記』などの用例が引用され、時間的にも、ジャンルのにもかなりひろい範圍にわたって「人」の自稱詞用法の見えることが記されている。ただし、代名詞という、（漢語にあって）地域性・時代性の比較的強い品詞の問題を考えるにあたって、このように文語系資料と口語系資料を等價的に取り扱うことについては、検討の餘地があるだろう。とくに『詩經』「鄘風・柏舟」の用例について言えば、それが詩歌作品であるだけに、はたして當時の口語をそのまま寫し取ったもの（「毛伝」）によれば、この詩は共姜という女性が父母に訴えかけたことば）なのか、それとも文語の分野における一種の文學的修辭として用いたものなのか、にわかに断定しがたい。

しかしそれはともかく、この發言のなかで重要な點は、「人」のもつ「語氣」に着目していることである。これはこの代名詞が、たんに抽象的かつ機能的に人稱を示すだけでなく、文のなかで一種のモダリティ（心態表現）と深く関わっていることを示唆するものと言えよう。

以上、自稱詞「人」に關するふたつの先行發言を通じて、本來「他人」を指す「人」という代名詞が自稱詞となる言語的なしくみ、ならびにそれがある特殊な「語氣」を表す、ということの二點が確認された。

ただ、この二説は、どちらかと言えば現代語の「人家」に比重を置いた解釋・説明となっており、古代漢語、ことに本稿が對象とする中古漢語での用法については必ずしも明らかにされていない。また古代漢語の「人」に自稱詞としての用法があることを認めるとして、それがどのような發話情況のもとに置かれているのか、という「言語使用の場合」(situation of discourse)に對する考察はまったくなされていないように思われる。そこで次に、『世說新語』の自稱詞「人」に關與しているコンテキスト——主として社會的コンテキストと對人關係的コンテキスト——を具體的に検討し、他稱詞から自稱

『世說新語』に見える「人」の自稱詞用法（井上）

詞への變換に影響を及ぼしている諸要因を解明してみたい。

### 3 自稱詞「人」の使用條件

#### 3・1 話者の屬性——社會的屬性

一般に、ある特定の社會における言語使用の問題を考える場合、まず重要なポイントは、そのことばがどのような人によって使われているのか、という點であろう。すなわち、話手の屬性である。社會言語學では、性別、年齢、地域、社會階層、民族といった話手の社會的な特徴に應じて、さまざまな言語變種 (language variety) が存在すると考えている。

事實、『世說新語』に限ってみても、そこで使われていることばは必ずしも均質なものではなく、出身地、社會的地位、職業などによっていくつかの變種を認めることができる。とりわけ出身地（地域性）は、中國の言語を考えるさいに缺くことのできない視點の一つと言えよう。

話者の屬性は大別して、性、年齢などの生得的屬性と、出身地、社會的地位といった社會的屬性の二つがあるが、ここでは後者を中心に考察を進めることにする。

さて『世說新語』に見える「人」の用例のうち、自稱詞の用例と考えられるものは、およそ42例ある。それを話者の生年順に示すとほぼ次のようになるう。

阮籍(1例)、晉文帝・司馬昭(1例)、王渾(1例)、郭奕(1例)、晉武帝・司馬炎(1例)、石崇(1例)、王澄(1例)、庾敳(1例)、王衍(1例)、王導(4例)、周嵩(1例)、李廞(1例)、顧和(1例)、庾亮(1例)、王恬(1例)、王薈(1例)、江彪(1例)、孫盛(1例)、褚裒(1例)、殷浩(1例)、王濛(1例)、桓溫(1例)、劉惔(3例)、支遁(1例)、謝安(6例)、王胡之(1例)、王蘊(1例)、王獻之(2例)、王國寶(1例)、殷仲堪(1例)、<sup>(10)</sup>不明(1例)。

まずこれらを一瞥してわかることは、使用者(話者)の社會的地位がほとんど官僚階級に偏っていることである。これはむろん、自稱詞「人」の使用がとくにこの階級と關與していることを示すものではなく、主として六朝貴族たちの言行を記録しようとする『世說新語』という書物自體の性格に負うところが大きい。とはいえ、ここで留意されるのは、そう

した書物の性格にも關わらず、そこに少數の例外が含まれていることである。

たとえば司馬炎は、言うまでもなく、西晉の初代皇帝であり、また支遁は東晉時代を代表する高僧として知られる。さらに李廞という人物は、西晉の平陽太守であった李重(二五七―三〇四)の子であるが、終生仕官を拒み續けた隱者であった(劉孝標注所引『文字志』)。

ということは、自稱詞「人」は官界においてのみ用いられる語ではなく、天子であれ、僧侶であれ、また隱者であれ、その社會的地位とほとんど關係なく使用されていたと考えられるわけである。この點は、「孤」(天子)、「貧道」(僧侶)といった、使用者に制限のある自稱詞と比較することによって、よりいっそう明確に理解されよう。

一方、話者の出身地について見た場合も、これとほぼ同様の結果が得られる。

ふつうある人物の出身地を知るためには、歴史書の記載に依ることが多いが、そこに記されている場所は、往々にして本來の籍貫(南朝人には僑郡を指す場合もある)を指しており、必ずしも本人の出生地を示すとは限らない。それゆえ、その

人物がどの地域の方言を日常言語としていたのかを判断するのはかなり難しいと言わねばならない。

しかしこの場合、東晉王朝（三一八～四二〇）建國以後に生まれた謝安（謝氏の據點は首都建康）以下の六人については、その出生地が東晉の疆域、すなわち淮水以南の地であることはほとんど疑いを容れないであろう。

これに對して、それ以前の二十四人は、史書の記載によると、現在の河南、河北、山西、山東、江蘇、安徽と多岐にわたっており、それが出生地と一致するのかどうかは詳らかではない。

ただ、孫盛については、『晉書』卷八十二に「孫盛字安國、太原中都（今の山西省平遙縣）人。……盛年十歲、避難渡江。」とあり、その幼少期を長江以北で過ごしたことが確認できる。また『晉書』卷四十九に「陳留尉氏（今の河南省尉氏縣）の人」と記される阮籍についても、父瑀が曹操の幕僚であったときの子であることから判断して、曹操の根據地鄴（今の河北省磁縣の南）に比較的近いところで出生したと考えるのが自然である。少なくとも、いわゆる北人と思ふことは許されるだろう。

とすれば、自稱詞「人」は南人のみならず、北人において

『世說新語』に見える「人」の自稱詞用法（井上）

も用いられていることになり、その使用に南北の地域差がほとんど認められないと判断されるわけである。

こうして見ると、『世說新語』における自稱詞「人」は、話者の社會的地位や出身地域の相違に關係なく、ひろい範圍で使用されていることになる。これはつまり、「人」という語が、社會的方言 (societal) でもなく、また地域的方言 (dialect) でもないことを意味する。したがってこの自稱詞「人」の使用については、話者の屬性とは別の要因を考えてみる必要があるだろう。

### 3・2 場面的要素

話し手の人的要素とならんで、もうひとつの重要なポイントは、その語がどのような場面で作られているのか、という場面的要素であろう。

言うまでもなく、ひとは常に同じことばを使って言語行動を行っているわけではない。同一個人であっても、社會的場面が異なればそれに應じて使用することばも違ってくるのがふつうである。たとえば、話しことばと書きことば、また公的な場面と私的な場面といったことにより、ことばのスタイル

ルが異なることが多い。

とりわけ人稱詞は、古代漢語の語彙のなかで場面による使い分けのもっとも著しいものであり、聞き手との對人關係や文語・口語の相違などに應じてそのコンテクストにふさわしい語の選擇使用が求められる。いま『世說新語』に限って見ても、「人」以外に「我、吾、朕、余、予」などの一人稱代名詞、「臣、身、僕、民、孤、妾、下官、微臣、寡人、小人、賤民、老子、貧道、弟子」などの普通名詞、「老兄、弟、新婦」などの親族名稱、および自分自身の名前（名、字、姓、十、姓、十、名）といった、じつに多彩な語が自稱詞として用いられており、當時の話者が自分の置かれている場面にもっともふさわしい語を意識的に使い分けていたことが知られるのである。

もっとも場面的要素といっても、そこにはさまざまな條件が考えられる。たとえば、場所・状況などの空間的條件や時間・時代などの時間的條件をはじめ、どんな媒體や方法で相手に傳達するかという媒體條件、聞き手との間に存在する對人關係の條件、さらに對話の場における話者の心理状態という心理的條件まで含めることが可能であろう。が、ここでは人稱詞の切り替えにとくに關與していると思われる、「對人

關係」と「心理状態」の二點を中心に考えてみたい。

### 3・2・1 對人關係

まずは對人關係の點から考察を加えることにしよう。

中古漢語の人稱詞（自稱詞と對稱詞）の多くは、日本語のそれと同じく、たんに話し手と聞き手の役割を示すだけではなく、兩者の人間關係を記號化するという、指標としての機能をもっている。言い換えれば、話し手は相手との社會的な上下關係や親疎關係に應じて、そのつど人稱詞を切り替えていかなければならないということである。たとえば、臣下が天子に對するさいは、「臣↓陛下」となり、また親しい間柄では、「我↓卿<sup>(12)</sup>」となる。もしかりに、天子に對して自分を「孤」と表現したり、反對に部下に對して「下官」と自稱すれば、それは待遇表現としてまことに不適切であると言わねばならない。

ところが、こうした觀點から自稱詞「人」の使用例を見てみると、じつに興味深い現象が認められるのである。

(1) 武帝謂劉仲雄曰、卿數省王、和不。聞和哀苦過禮、使人憂之。



晉の武帝は劉仲雄（劉毅）に言った、「おまえは何度か王戎と和嶠を見舞ってやったかね。和嶠は禮法をこえて哀しみ悼んでいるそうで、まことに心配でならぬ。」

〔德行〕17〕

（2）謝太傳問諸子姪，子弟亦何預人事，而正欲使其佳。

謝太傳（謝安）が息子や甥たちにたずねた、「身内の若者たちのことなど、わたしにかかわりのないことだ。それなのに、その者たちがぜひ立派であってほしいと思うとは。」

〔言語〕92〕

（3）顧司空未知名，詣王丞相。……（顧）因謂同坐曰，昔每聞元公道公協贊中宗，保全江表，體小不安，令人喘息。

顧司空（顧和）が無名であったころ、王丞相（王導）のもとを訪ねた。……顧和は同席している人々に言った、「昔元公（顧榮）から、この丞相どのが中宗（元帝）を輔佐して江南を安定されたという話を聞くたびに、わたし

『世説新語』に見える「人」の自稱詞用法（井上）

はじっとしていられず、息をはずませたものです。」

〔言語〕33〕

（4）王司州管乘雪往王螭許。司州言氣少有悖逆於螭，便作色不夷。司州覺惡，便輿牀就之，持其臂曰，汝詎復足與老兄計。螭撥其手曰，冷如鬼手聲，彊來捉人臂。

王司州（王胡之）はあるとき、雪に乗じて王螭（王恬）のもとへ出かけた。王司州の物言いが少し王螭の癪にさわって、螭はむっとして怒りを顔に表した。司州は不快になって、腰掛けをかついで王螭に近づき、その腕をつかんで言った、「おまえなんか、この老兄わいとはりあえるものか。」螭はその手を拂いのけて言った、「まるで幽霊の手みたい冷たいなあ。わたしの腕を無理やりつかんで。」

〔忿狷〕3〕

（1）は晉の武帝が、臣下である劉毅に對して發言したもので、明らかに社會的上位者が下位者に對して自らを「人」と稱した例である。もとより兩者の間にはとくに親密な關係が

あるわけではなく、それは聞き手である劉毅が同じ文中で「臣↓陛下」という人稱詞を使っていることから理解される。一方、(2)は親族間という親しい閒柄ではあるが話し手(謝安)が自分の息子や甥たちに問いかけたものであり、これも目上が目下に對して使用した例と考えられる。

これに對して(3)(4)は、その正反對に下位者が上位者に對して使用した例である。(3)は、顧和が王導の家の集會の場で、同座の者および王導に話しかけたもの。このとき顧和は、まだ無名であつたということから見て、同座の客人たちよりも地位的には低かつたと考えるのが自然であろう。少なくとも丞相である王導の方が上位者であつたことは明らかである。(4)は、王恬が王胡之の暴力に怒りを表したもの。胡之が自らを「老兄」と稱していることからわかるように、恬にとつて胡之は從祖兄(曾祖を同じくする兄弟の年長者)にあたる。つまり話し手にとつて聞き手は、親しい閒柄とはいえ、明らかに目上に位置づけられるものである。

こうして見ると、自稱詞「人」は、相手との上下關係や親疎關係といった對人關係とほとんど關わりなく、目上のものであれ、目下のものであれ、また親しいものであれ、疎遠な

ものであれ、ほぼ等しく使用されていることになる。これは別の言い方をすれば、人稱詞でありながら待遇性をもたないという<sup>(13)</sup>ことであり、中古漢語の人稱詞の體系のなかでほとんど例外に屬するものと言つてよい。

ではなぜ、「人」は待遇性をもたないのか。それはおそらく、「人」という語が本來第三者もしくは他人を指す、一種の他稱詞であるために、それに対応する對稱詞をもっていないからであろう。つまり、「臣」であれば「陛下」、「我」であれば「卿」というように、それぞれの自稱詞に対応する對稱詞がおおまかながらも定まっている場合は、どうしても對人關係というコンテクストが浮き彫りにならざるをえない。しかし、本來的に對稱詞をもたない自稱詞「人」は、聞き手との關係性が記號化されていないために、待遇表現として機能しないわけである。

### 3・2・2 心理狀態

次にもう一つの場面的要素として、話し手の心理狀態について検討してみたい。この點に關しては、これまでの諸要素と異なつて明らかな傾向性を指摘することができる。それは大きく分けて二つに類別できよう。

第一は、贊嘆、感動、喜びといった肯定的な心情である。

(5) 郭(癸) 便自往。既見、歎曰、羊叔子何必減郭太業。復往羊許、小悉還、又歎曰、羊叔子去人遠矣。羊既去、郭送之彌日……復歎曰、羊叔子何必減顔子。

郭(癸)はすぐさま自ら出かけた。そして羊(枯)に會うと、嘆息して言った、「羊叔子(羊枯)はこのおれさまに劣らぬようだな。」再び羊のもとへ出かけて、しばらくして歸ると、また感嘆して言った、「羊叔子はおれよりはるかにすぐれているわい。」やがて羊が去ってゆくとき、郭は數日にわたって見送り……さらにまた感嘆して言った、「羊叔子は顔子(顔回)にも劣るまい。」

〔賞譽〕9)

(6) 王司州至吳興印渚中看。歎曰、非唯使人情開滌、亦覺日月清朗。

王司州(王胡之)は、吳興の印渚までやって來て風景をながめ、感嘆して言った、「心が洗われたようになる

『世說新語』に見える「人」の自稱詞用法(井上)

ばかりか、日月すらも晴朗に感じられる。」

〔言語〕81)

(7) 王渾與婦鍾氏共坐、見武從庭過。渾欣然謂婦曰、生兒如此、足慰人意。

王渾が妻の鍾氏といっしょに座っていたとき、息子の武子(王濟)が庭を横切った。渾はにこにこして妻に言った、「このような子をもって、わしの心は慰められるわい。」

〔排調〕8)

(5)は、話し手(郭癸)が羊枯の人柄に接し、その風格を褒め稱えたもの。最初の「羊叔子何必減郭太業」という表現・評價から、次の「羊叔子去人遠矣」、そして最後の「羊叔子何必減顔子」へと、面會の回数を重ねるにつれ、話し手の贊嘆の情が次第に深まっていくさまが讀みとれる。「郭太業」(姓十字)という自稱は、呂叔湘(一九八五)が指摘するように、禮儀にもとづくものではなく、反對に話し手の尊大な氣分を表す。

(6)は、話し手(≡王朝之)が吳興という土地を訪れたさい、その地の風景の美しさに感動したもの。(7)は、息子の成長ぶりを目の当たりにした話し手(≡王渾)が、父親としての喜びを妻に對して率直に語ったものである。

これらの例から、「人」で自稱する話し手が、對象の好ましい状態に心を動かされていることが確認されよう。

第二に、怒り、恨み、不満といった否定的な心理状態のときにも「人」が用いられることがある。

(8)陳太丘與友期行、期日中。過中不至、太丘舍去。去後乃至。元方時年七歲、門外戲。客問元方、尊君在不。答曰、待君久不至、已去。友人便怒曰、非人哉。與人期行、相委而去。

陳太丘(陳寔)は友人と約束して出かけることにした。正午にと約束したのに、正午を過ぎてもやって来ないので、太丘はほうって出かけた。出かけた後で、友人がようやくやって来た。元方(陳紀)はその時七歳で、門の外で遊んでいた。客が元方に「父君はおられるか。」と

尋ねると、元方は「長い間あなたをお待ちしておりましたが、おみえにならないので、もう出かけました。」と答えた。それを聞いた友人は怒って言った、「人でなしめ。わたしと一緒に行く約束をしておきながら、すてて先に行くとは。」

〔方正〕1)

(9)殷中軍廢後、恨簡文曰、上人箸百尺樓上、儻梯將去。殷中軍(殷浩)は退けられた後、簡文帝(司馬昱)を恨んで言った、「ひとを百尺の樓上にのぼらせておいて、梯子をかついでもって行くとは。」

〔黜免〕5)

(10)桓公欲遷都、以張拓定之業。孫長樂上表諫。此議甚有理。桓見表心服、而忿其爲異、令人致意孫云、君何不尋遂初賦、而彊知人家國事。

桓公(桓溫)は遷都して國土をひらき、天下を定めようとした。孫長樂(孫綽)は上表してこれを諫め、その

議論はたいそう理にかなっていた。桓公は上表文を見て心中感服したが、かれが異を唱えたことに腹を立て、人をやつて孫長樂に自分の意向を伝えさせた、「きみはなぜ『遂初賦』のとおりしないで、強いてわたしの國策に干渉するのか。」

〔輕語〕16〕

(8)は、陳寔に約束を破られた話し手(「友人」)が寔の息子に對して父の無禮を非難したもの。話者の怒りが、「非人哉(人でなし)」ということとともに直接的に表現されている。(9)は、話し手(「殷浩」)が自分を左遷させた皇帝について語ったものであるが、ここでは激しい怒りというより、恨みがましい口調となっている。(10)は、話し手(「桓溫」)が部下である孫綽の諫言に腹を立てて言ったもの。諫言の内容そのものには「心服」しているものの、諫言という出しゃばった行爲に對して「不滿」を抱いているわけである。

以上の諸例には共通して、他人の不當な行爲に對する話者の否定的な心情が読みとれよう。

ところで、ここで注意されてよいのは、自稱詞「人」の用

『世說新語』に見える「人」の自稱詞用法(井上)

例のなかに、話者のこうした明確な心理状態が認められるだけでなく、その心理が贊嘆と怒りという二つの點に集中していることである。すなわち、全42例のうち贊嘆・感動の心理状態にあるものが21例、また怒りや不滿が18例あり、『世說新語』における「人」の用例のほとんど大半を占めている。反對に命令、依頼、提案、説明、判斷、推測といったモダリティを表す文のなかで自稱詞「人」はまったく用いられていない。

とすれば、贊嘆、喜び、怒り、不滿といったごく限られた心情——すなわち情緒的な心理状態——においてのみ、「人」が用いられていることになり、これは自稱詞「人」の使用が、話者の心理状態、なかでも情緒性に深く関わっていることを意味するものであらう。換言すれば、ひとの才能や人格をほめたり、あるいは自分に對する不當な取り扱いに異議申し立てをする場合においてのみ、話し手は自分を「人」と呼ぶことができるのである。

そして一方、聞き手の側から言えば、「人」は話者の心理を表すサインとして機能していることになる。

要するに自稱詞「人」は、相手との心的距離ではなく、話者自身の心的状態を表す語であり、これを用いることによつ

て語氣の情緒化が行われるのだと言えよう。

#### 4 「人」の機能

ところでこの場合、話し手自身の情緒を表すときに、なぜ「人」という語が使用されるのかは興味ある問題と言える。既述したように、中古漢語の自稱詞は豊かな語彙をもっており、その選擇肢はけっして少なくないからである。しかも早くから人稱代名詞が發達した漢語にあつては、話し手が自分自身を指す場合には、一人稱代名詞（我、吾）を用いるのが普通である。

しかしこの問題については、まず一人稱代名詞を用いないこと自体に意味があると考えるのがわかりやすい。つまり、「我」という自稱詞があまりにも一般的でありすぎるために、それを用いる限り、贊嘆や怒りという特殊な語氣を表現することができないのである。が、「我」の使用を避けて、ほかの語に切り替えると、その避けるという行爲のなかにすでに話者の心理の動きが含まれることになる。それがこの場合、情緒のサインになっていると考えられよう。前掲の「郭太業」という自稱が、話し手の傲慢な氣分を表すのも、この點と無縁ではあるまい。

とはいへ、一人稱代名詞の使用を避けるという點だけでは、なぜほかの自稱詞ではなく、「人」でなければならぬのかが説明できない。そこで贊嘆や怒りの感情表現において、「人」がどのような役割を果たしているのか、その機能の獨自性を具體的に検討してみる必要がある。

##### 4・1 贊嘆における「人」

贊嘆、感動を表す21の用例を見て、まず氣づくことは、いずれも別の第三者（または無生物）を話題の對象としていることである。言い換えれば、同じ贊嘆の情であっても、直接對話の相手をはめるときには、「人」という語は用いられないということである。たとえば、

（11）（謝安）去後、荀子問曰、向客何如尊。長史曰、向客  
 臺臺、爲來逼人。

謝安が歸つた後、荀子（王脩）はたずねて言った、「さきほどの客は父上と比べていかがですか。」長史（王濛）は答えて言った、「さきほどの客は、よくまあ飽きもせず、わしにせまりよるわい。」

(12) 庾太尉少爲王眉子所知。庾過江，嘆王曰，庇其宇下，使人忘寒暑。

庾太尉（庾亮）は若いときから王眉子（王玄）に認められていたが、庾は江南に移ってから王を贊嘆して言った、「その屋根の下に居ると、寒さ暑さも忘れてしまふ。」

〔賞譽〕35)

(13) 王太尉曰，見裴令公，精明朗然，籠蓋人上，非凡識也。

王太尉（王衍）が言った、「裴令公（裴楷）を見ると、その人柄は純粹で晴れやかで、われわれの頭上をおおっており、その見識は非凡である。」

〔賞譽〕24)

とあり、いずれも對話の場にはない別の第三者について語っている。

『世說新語』に見える「人」の自稱詞用法（井上）

ところで、ここに用いられている「人」の指示対象を見てみると、そこには若干の差異が存在することがわかる。つまり、(11)は話し手（王濛）だけを指すものであるが、あとの二例、とくに(13)の場合は、文脈から判断して、話し手（王衍）のみならず、對話の場にいる聞き手をも含むものと考えられる。

では、なぜ「人」は話し手だけを限定的に指すばかりでなく、ときに聞き手をも指すことができるのか。それはおそらく、この語の言語的なしくみによるものであろう。

既に呂叔湘（一九八五）に見たように、他稱詞である「人」が自稱詞となるためには、基點（視點）の移動を必要とする。自分を基點にすると、「人」は當然、話し手・聞き手以外の第三者を指すことになるが、一時的に他者に基點を移すことによって、その人にとっての「他人」である自分自身を指示することができるのである。

そしてこの場合、「人」は、その基點を聞き手ではなく、話題の対象である第三者に置いていると考えてよい。そうでなければ、聞き手が基點であることになり、「人」の指示対象は自動的に基點＝聞き手以外の人になるからである。逆に別の第三者を基點にすれば、「人」は、かれ（王玄、裴楷）以

外の人である、「わたしたち」すなわち、話し手と聞き手の両方を指すことができる。

もっとも、自稱詞「人」はつねに「わたしたち」を指すわけではない。「人」の指示対象は、話し手だけであることもあれば、聞き手を含むこともありうる。それは、状況コンテキストや話題領域から聞き手によって判断されるものである。

しかし、ここでとくに重要な點は、贊嘆を表す場合における「人」の指示対象が、話し手から聞き手へと擴張されていくということである。そして、この指示対象の擴張化という機能・性質は、贊嘆の情緒と密接に關連するものでもある。なぜなら、ひとをはめる場合は、その感動をわたし個人のものにとどめないで、一般化・普遍化したほうが、その情緒をより強調することになるからである。

要するに、贊嘆・感動を表現するときに用いられる「人」の用法は、その感動の感じ手を特定・限定させず、むしろそのことで話し手の感動をより普遍的なものとして提示することにあると言つてよい。<sup>(16)</sup> 贊嘆・感動といった情緒を表すときに、ほかの自稱詞ではなく、「人」が用いられるのは、まさにこの機能によるものと言えよう。

#### 4・2 怒りにおける「人」

次に怒りや不満を表す場合の「人」の機能について考えてみよう。自稱詞「人」にはいくつかの機能があるが、この場合、とくに重要だと思われるのは、直示性の低さによる指示対象の離化という點である。これは「我」などの一人稱代名詞と比較することによって、よりよく理解される。

言うまでもなく、「我」という一人稱代名詞は、對話の役割（話し手）だけを直接的かつ同時に示す役割を擔うものである。したがって、その指示対象はきわめて明瞭であり、それだけに「わたし↕あなた」という關係性・對立性が強く打ち出されることになる。

これに對して、「人」という人稱詞は、それ自身、だれを指すのかはつきりしない。つまり本來的に指示対象を與えられていない人稱詞だと言える。しかし、指示対象が直接明示されないということは、一方で、對話の場面における自分對相手という對立性を弱めることになる。少なくとも、「我↕卿」のような對立的視點が焦點化されることはない。

したがって、それが怒り・不満のような對立的心理状態において用いられた場合、自ずから怒りの感じ手が曖昧化（離



化)され、それによって對話の相手との對立的な人間關係を  
 ぼかすことになる。

言い換えれば、自分を「人」——「我」ではなく——と呼ぶ  
 ことによって、話し手個人の怒りの感情が表現として緩和さ  
 れるわけである。現代語の「人家」が「俏皮」に感じられる  
 (前掲、呂叔湘「一九八五」)のも、おそらくこの點と無關係で  
 はあるまい。

次の用例は、この想定を傍證するものとして、注目され  
 る。

(14) (鍾會)既至。(晉文帝)因嘲之曰、與人期行、何以遲  
 遲。望卿遙遙不至。

鍾會がやつとのこと追いつくと、晉文帝(司馬昭)  
 は嘲って言った、「わたしと同行の約束をしておきなが  
 ら、どうしてぐずぐずしていたのか。きみを待ち望んで  
 いても遙遙としてなかなか来なかったではないか。」

(「排調」2)

この例に見える「與人期行」の句は、前掲(8)の用例と同

『世說新語』に見える「人」の自稱詞用法(井上)

じものであるが、ここでは話し手の心理が「怒」ではなく、  
 「嘲」すなわち、「からかう」という動詞によって表現されて  
 いることは留意されてよい。これは、「人」が表す怒りの感  
 情が、じつは必ずしも激しいものでないことを示唆するもの  
 であろう。反對に激しい怒りを表すと考えられる文脈のなか  
 では、もっぱら「我、吾」という自稱詞が用いられているこ  
 とが指摘できる。<sup>(17)</sup>

ということは、「人」という語には、「我」にはない、對立  
 的な人間關係を非焦點化する働きがあると云ってよい。そし  
 て自稱詞「人」が「怒り」という情緒を表すさいに用いられ  
 るのも、この語に「指示對象の醜化」という機能があるから  
 であり、それによって話し手が「怒り」という強い感情を、  
 表現上やわらげることができるのである。

このように考えてくると、なぜ贊嘆や怒りといった情緒を  
 表すときに、「人」という自稱詞が用いられるのかは、自ず  
 から明らかだと言わねばならない。おそらく、こうした機能  
 は、他の自稱詞が代替できるものではないだろう。なぜな  
 ら、他の自稱詞は、基本的に直接的な自己指示を行うからで  
 ある。

すなわち、「我、吾、余」という自稱詞では、自分を基點にして指示を行うために、それがだれを指すのかは、きわめて明確であり、指示對象が曖昧化されることはありえない。これに對して、自分以外の他者を基點にする「人」は、指示のしかたがより、間接的になるため、指示對象が限定化されにくくなるわけである。そして、この指示の間接性という點はまた、贊嘆の情を表す場合には、指示對象を擴張、化し、一方、怒りの場合には、指示對象を臘化するという機能をもつことになる。そうしてみると、語氣の情緒化という點において、指示の間接性がもつ意味はけつして小さくはないと言えるよう。

## 5 結 語

以上、『世説新語』に見える「人」という人稱詞を對象として、他稱詞から自稱詞への變換に關與している要因、およびその機能の特色について考えてきた。その要點をまとめるとほぼ次のようになろう。

① 古代漢語の人稱詞「人」は、「特定のある人」および「自分・當事者以外の人」という、他稱詞をその基本用法とするが、一方で話し手自身を指す自稱詞としての用法もあり、

『世説新語』のなかには42の用例が見出せる。

② その用例を具體的に検討すると、自稱詞「人」の使用に關與しているのは、話者の社會的地位や出身地といった人的要素ではなく、發話・對話の場における話者の心理状態という場面的要素であると言える。

③ しかも、その心理は、贊嘆、感動、喜び、怒り、恨み、不満といった、きわめて情緒的なものであり、「人」という自稱詞がそうした話し手の語氣を情緒化する役割を果たしているものと考えられる。

④ 一人稱代名詞が話し手を基點に直接自分を指すのに對して、「人」は自分以外の他者を基點に自己指示を行う點に特徴があり、その指示の間接性が、指示對象の擴張、および指示對象の臘化という機能を生み、贊嘆や怒りという話し手の情緒を強調または緩和することになる。

既に見てきたとおり、「人」という語は、一人稱代名詞のように、對話の役割だけを機能的に示す、無色透明な自稱詞ではない。それは、話し手を指示すると同時に、その人の情緒という別の情報を傳達するものである。したがって、もしかに「人」という語が存在しなかったならば、漢語の感情

表現は、——とくに對話における人間關係という點で——もっとニュアンスの乏しいものになっていたのであろう。古代漢語の人稱詞の體系のなかで、自稱詞「人」のもつ意味は意外に大きいと言わねばならない。

〔注〕

(1) いわゆる paternal “we” (保護者的な we) と呼ばれるもので、醫者が患者に對するときや、先生が幼い生徒に對するときに使用される。鈴木(一九七一)を参照。

(2) 鈴木(一九七一)では、英語のひとりごとにおいて話者が二人稱で自分自身に呼びかける場合があることを指摘している。

(3) 奥水(一九七七)に、「書き言葉で、自分の見解を婉曲にするため、複數形 “women (我們)” を使い、謙遜の氣持を示す例がある。いわゆる editorial “we” にあたる」とある。ちなみに王力(一九八四)では、北京語のなかで我們が一人稱單數の「禮貌式」として借用される場合は發音が變化する、と言う。

(4) たとえば大人が子供に對して「咱們不哭」(泣いちゃだめ)と呼びかけることがある。大西(一九九二)および錢鍾書(一九八六)を参照。なお現代中國語の人稱轉換の様相に關しては、張煉強(一九八二)に詳し。

『世說新語』に見える「人」の自稱詞用法(井上)

(5) 本稿では、鈴木(一九八二)の説に従い、「發話の中で話者が自分自身を指示あるいは言及する語」を「自稱詞」、「話者が發話の相手を指示・言及する語」を「對稱詞」、「第三者を指示・言及する語」を「他稱詞」と呼ぶことにする。もちろん一人稱代名詞は、自稱詞であるが、自稱詞は必ずしも一人稱代名詞ではない。一人稱代名詞以外のものも含みうる上位概念として定義される。

(6) 周法高(一九五九、王力(一九八四)など。また楊伯峻・何樂士『古漢語語法及其發展』(語文出版社、一九九二年)では、 $\kappa$ 己身稱 $\kappa$ 詞あるいは自稱詞に對するという意味で、 $\kappa$ 旁稱詞 $\kappa$ と命名し、他稱代詞とは別に分類している。

(7) 『漢語大字典』(四川辭書出版社・湖北辭書出版社、一九八六年)では、「指自己」と解説し、『世說新語辭典』(四川人民出版社、一九九二年)では、「猶言我、我們」とする。また、詹秀惠『世說新語語法探求』(臺灣學生書局、一九七三年)では、「人」を「第一身稱代詞」と見ている。

(8) 現代語の「人」と「人家」の差異に關して、呂叔湘主編『現代漢語八百詞』(商務印書館)は、「話し言葉では $\kappa$ 人家 $\kappa$ を $\kappa$ 人 $\kappa$ と省略できる。ただし文末に $\kappa$ 人家 $\kappa$ があるときは不可」として、純粹に文法規則による制約以外に兩者の差異は認められないと考えているようである。しかし、大西(一九九二)では、「你們讓不讓人睡覺呀?明天人家還早起呢!」という例を挙げ、「兩者の言語環境は必ずしも一致する

## 中國詩文論叢 第十七集

わけではない」と説く。たしかに同論文が引く用例を見て、**「人」**と**「人家」**の間には文法による使用規則とは別の（ここではともに文中に置かれる）差異が存在するようである。ちなみに劉月華等（一九八三）では、自稱詞の**「人家」**は若い女性が常用するもので、甘えて怒っているような、またはなれなれしいような語感をもつ、と記している。**「人家」**の使用に性差が関わっているという指摘は興味深い。なお張煉強（一九八二）は、**「人家」**が話し手自身を指すだけでなく、相手を指す場合があることを指摘している。このような用法は、古代漢語の**「人」**には見られないものである。

- (9) ふつう人稱詞の問題は、中國語學においても、また日本語學においても、語用論の領域で扱われることが多い。周知のように、語用論は對話を行っている個人（とくに心理的側面）に研究の焦點があるため、社會的コンテキストよりも對人的コンテキストを優先する傾向がある。本論文では、言語と社會構造とが不可分の關係にあるという觀點に立ち、對人的コンテキストのみならず、社會的コンテキストについてもあわせて考察を試みることにした。

- (10) 第三章(8)の用例に見える、陳寔（一〇四―一八七）の**「友人」**なるもの。姓名は記されていない。

- (11) 『世說新語』に即して言うかぎり、**「人」**の使用に地域差を認めることはできないが、近代漢語の**「人家」**は、吳地方の方言であったとされる。許少峯主編『近代漢語詞典』（團結

出版社、一九九七年）参照。

- (12) 對稱詞**「卿」**は本來、尊稱であるが、六朝時代にはすでに尊敬の語氣はなくなっており、目下や同輩に對して気軽に用いられる。牛嶋（一九六六）によると、この語は、「親愛の情を表す」。『世說新語』のなかで、「我↕卿」という對はよく見えており、「おれ↕おまえ」といったかなりぞんざいな呼び方であったことがうかがわれる。

- (13) 管見の範圍では、中古漢語の**「人」**が待遇性をもたないという點に關する指摘はない。この點は、本稿の論旨と直接に關わるものでないが、中古漢語の人稱詞研究にとって大事なポイントの一つと考えられるので、後日稿を改めて論じた。ちなみに、現代日本語のなかで待遇性をもたない自稱詞には、軍隊用語の**「自分」**という語がある。田窪（一九九七）に詳しい。

- (14) 残りの3例は、以下のようなものである。①第三章(1)所掲の**「聞和哀苦過禮，使人憂之」**（『德行』17）、②**「謝公曰，賢聖去人，其間亦適」**（『言語』75）、③**「石崇……歎曰，若與同升孔堂，去人何必有間」**（『汰侈』10）。①は、話者の心配・不安といった感情を表すもの。②と③は自分と聖人との間に大差がないことを誇ったもので、一種の自慢と考えられる。これらも情緒的心理という點では共通していよう。なお②の**「人」**を**「凡人」**と解する説もある。

- (15) (12)の例については、ほぼ同じ話が晉の裴啓『語林』（『太

平御覽」卷三六五、三七四所引)にも記載されており、そこでは「我輩皆出其轅下」に作る。「使人忘寒暑」の「人」が、話し手一人ではなく、聞き手も含めた「われわれ」を指していることを傍證するであろう。

- (16) 逆に一人稱代名詞「我」を用いて対象をはめると、感動の感じ手が限定され、その評價が普遍性をもたない。これはもっぱら限定的に自分との優劣を比較する文脈のなかで用いられる。〔王〕丞相目子躬云、入理泓然、我已上人。〔賞譽〕40)、「魏武帝」乃歎曰、我才不及卿、乃覺三十里。〔捷悟〕3)。

- (17) (武帝)聞尚不和、乃怒問雄曰、我令卿復君臣之好、何以猶絕。〔方正〕16)、「(母)反書責(陶)侃曰、汝爲吏、以官物見餉。非唯不益、乃增吾憂也。〔賢媛〕20)など。また、「弟」などの親族名稱も用いられている。「周仲智飲酒醉、瞋目還面謂伯仁曰、君才不如弟、而橫得重名。〔雅量〕21)。

(補注) We may use the term "generic person" for what vaguely comprises all persons. In English one is used in this sense, often as a kind of disguised I.  
: Otto Jespersen, *Essentials of English Grammar*, 1933.

『世說新語』に見える「人」の自稱詞用法(井上)

# 『參考文獻目録』

※著者名の五十音順に列挙する。

牛嶋徳次(一九六六)『中古漢語の人稱と呼稱』『中國語學』一五九

太田辰夫(一九八五)『中國語歴史文法』朋友書店

大西智之(一九九二)『中國語の自稱詞』『中國語學』二三九

王力(一九八四)『中國語法理論』第四章『王力文集第1卷』

山東教育出版社

興水優(一九七七)『中國語における敬語』『岩波講座 日本語 4 敬語』岩波書店

周法高(一九五九)『中國古代語法・稱代編』中央研究院歷史語言研究所專刊三十九

鈴木孝夫(一九六八)『言語と社會』『岩波講座哲學Ⅳ言語』岩波書店

——(一九七一)『言語における人稱の概念について』『慶應義塾大學言語文化研究所紀要』第2號

——(一九七六)『自稱詞としての「ひと」』『慶應義塾大學言語文化研究所紀要』第8號

——(一九八二)『自稱詞と對稱詞の比較』國廣哲彌編『日英語比較講座第5卷 文化と社會』大修館書店

錢鍾書(一九八六・第二版)『管錐編』第二冊『太平廣記一七五・吾人』中華書局(初版は一九七九年)

## 中國詩文論叢 第十七集

田窪行則（一九九七）「日本語の人稱表現」『視點と言語行動』  
くろしお出版

趙元任（一九五六）“Chinese terms of address” *Language*,  
vol. 32, no. 1

張煉強（一九八二）「人稱代詞的變換」『中國語文』第3期

陳福輝（一九九七）「現代中國語の自稱詞」『中國語學』二四四

日加田誠（一九七八）『世說新語』新釋漢文大系、明治書院

余嘉錫（一九九三）『世說新語校箋（修訂本）』上海古籍出版社

劉月華等（一九八三）『實用現代漢語語法』外語教學與研究出

版社

呂叔湘（一九八五）『近代漢語指代詞』學林出版社